

恩田満【日】 编著
陈高峰 译
陈德文 审校



日本

中世、近世文学
作品选析



北京师范大学出版集团
BEIJING NORMAL UNIVERSITY PUBLISHING GROUP
安藏

古今和歌
恩田満【日】 编著
陈高峰 译

陈德文 审校

風は、観念的な傾向が
なれた歌風の特徴として
が多かった。

家物語

男壮な合戦場面は迫力を
とした表現で描かれ、モ
も美しく哀切に物語られ
奥の細道

芭蕉の数ある紀行文の中

る。各地で俳句を詠んで本

が独立した句としても高い完成

知られている。



日本

中世、近世文学

作品选析



北京师范大学出版集团
BEIJING NORMAL UNIVERSITY PUBLISHING GROUP
安徽大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本中世、近世文学作品选析/(日)恩田满编著. —合肥:安徽大学出版社, 2015. 6

ISBN 978-7-5664-0839-6

I. ①日… II. ①恩… III. ①日本文学—中世纪文学—文学作品研究
②日本文学—近代文学—文学作品研究 IV. ①I313.06

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 230315 号

世界文学作品选读系列·日本文学 日本中世、近世文学作品选析

恩田 满〔日〕编著 陈高峰 译 陈德文 审校

出版发行: 北京师范大学出版集团
安徽大学出版社
(安徽省合肥市肥西路3号 邮编 230039)
www.bnupg.com.cn
www.ahupress.com.cn

印 刷: 合肥远东印务有限责任公司
经 销: 全国新华书店
开 本: 170mm×240mm
印 张: 26.5
字 数: 518千字
版 次: 2015年6月第1版
印 次: 2015年6月第1次印刷
定 价: 53.50元
ISBN 978-7-5664-0839-6

策划编辑: 刘中飞 卢 坡
责任编辑: 卢 坡 张 雯 唐 敏
责任校对: 程中业

装帧设计: 武 迪 柳梦曦
美术编辑: 李 军
责任印制: 陈 如

版权所有 侵权必究

反盗版、侵权举报电话: 0551-65106311

外埠邮购电话: 0551-65107716

本书如有印装质量问题, 请与印制管理部联系调换。

印制管理部电话: 0551-65106311

前言

当前，中国的日语学习者人数逐年增多。迄今为止，以训练、练习的形式培养学习者日语听、说、读、写能力的应试型教育成为了中国日语教育的主流。充当着中国日语教育的主流。然而，近年来，学习者对日本文化和日本文学理解的需求日益丰富多样。

鉴于这一需要，本书为中国的日语语言和日本文学学习者们编撰。至今相当多的中日两国的专家或教师们编撰了大量关于近现代日本文学的优秀作品，然而对于日本的中世和近世文学，涉猎其中的人还为数不多。。

较之于对历史和社会现状的平铺直叙，日本的中近世文学更加关注人心深处的爱和哀伤。对情感的抒情式描写是日本古典文学的一个特征，当然，其中也有深受中国儒家思想和佛教思想影响的一面。例如战乱时期的中世文学，处处流露着佛教的无常观。转而至近世之后，知识因素受到推崇，日本文学从而迎来了文坛的全面开花。

笔者意欲沿着日本中近世文学的发展历程，对节选出来的各个时代的代表作品进行详细解析，从而加深读者对日本传统文学和文化的理解。此外，作为编写者，笔者也深切希望读者们通过对本书的学习，掌握包括敬语在内的现代日语的使用方法，并理解深藏于现代日本人内心深处的传统思维方式。

本书在内容编排上本着方便读者的原则，具有以下几个特点：

① 文中出现的大部分汉字均有现代日语的假名注音，且以旧假名记载的正文部分也采取同样方式。

② 文中的汉字，原则上用当前通行的字体，至于常用汉字表里的汉字，则沿用其原有字体。

③ 关于文中的单词、惯用句，以及助动词、助词的意思和用法的解释，本书尽可能为读者在注解部分附上。

恩田 满
2015年1月



目 录

前 言 /001

第一部分 中世文学

新古今和歌集 /002

- [一] 仮名序 /002
- [二] 春の歌 /007
- [三] 夏の歌 /011
- [四] 秋の歌 /014
- [五] 冬の歌 /017
- [六] 哀傷歌 /020
- [七] 羈旅歌 /022
- [八] 恋 歌 /024
- [九] 雑 歌 /027

方丈記 /030

- [一] 序 /030
- [二] 安元的大火 /034
- [三] 治承の旋風 /038
- [四] 養和の大飢饉 /042
- [五] 元暦の大地震 /047

宇治拾遺物語 /052

- [一] 児のかいもちひするに空寝したること /052
- [二] 絵仏師良秀、家の焼くるを見て喜ぶこと /057
- [三] 小野篁、広才のこと /063
- [四] 河原院、融公の霊住むこと /067



平家物語 /073

- [一] 祇園精舎 /073
- [二] 平家一門の繁栄 /077
- [三] 文覚上人の荒行 /083
- [四] 入道死去 /090
- [五] 平敦盛の最期 /096
- [六] 建礼門院の出家 /105

十訓抄 /112

- [一] 総序 /113
- [二] 『莊子』の「木雁」の話（第二の二） /120
- [三] 小式部内侍の大江山の歌（第三の一） /123
- [四] 安養の尼の小袖（第六の三十六） /126

古今著聞集 /130

- [一] 小大進、歌によりて北野の神助を蒙る事（巻第五・和歌・一七七） /130
- [二] 嵯峨天皇、弘法大師と手跡を争ひたまふ事（巻第七・能書・二八六） /136
- [三] 刑部卿敦兼の北の方、夫の朗詠に感じ、契りを深うする事（巻第八・好色・三一九） /140
- [四] 弓の手利き季武が従者、季武の矢先を外す事（巻第九・弓箭・三四七） /145

徒然草 /151

- [一] つれづれなるままに（序段） /152
- [二] あだし野の露消ゆる時なく（第七段） /153
- [三] 世の人の心惑はすこと（第八段） /157
- [四] 人は己をつづまやかにし（第十八段） /159
- [五] よろづのことは（第二十一段） /162
- [六] 亀山殿の御池に（第五十一段） 165
- [七] 仁和寺に、ある法師（第五十二段） /167
- [八] 友とするにわろき者（第百十七段） /169
- [九] 花は盛りに（第百三十七段） /171
- [十] 心なしと見ゆる者も（第百四十二段） /175



増 鏡 /181

- [一] 後鳥羽院の出生・践祚 /181
- [二] 隠岐の島の後鳥羽院 /187
- [三] 蒙古襲来 /198
- [四] 北条氏滅亡 /205

第二部分 近世文学

好色五人女 /212

- [一] 姿姫路清十郎物語 /213
- [二] 恋草からげし八百屋物語 /225

世間胸算用 /239

- [一] 長刀はむかしの鞘 /240
- [二] 門柱も皆かりの世 /249
- [三] つまりての夜市 /255

奥の細道 /264

- [一] 漂泊の思い /265
- [二] 旅立ち /268
- [三] 日光参詣 /271
- [四] 白河の関 /275
- [五] 平泉 /278
- [六] 立石寺 /282
- [七] 越後路 /284

浄瑠璃 /287

一 曾根崎心中 /287

徳兵衛・お初の道行き /288

- [一] 道行き /288
- [二] 人魂 /295
- [三] 心中 /298

二 冥途の飛脚 /305

新口村の段 /306



川柳・狂歌 /318

[一] 川柳 /318

[二] 狂歌 /327

雨月物語 /345

[一] 雨月物語序 /345

[二] 菊花の約 /349

滑稽本 /377

[一] 酩酊気質 /377

異見上戸 /378

利屈上戸 /387

[二] 浮世風呂 /392

浮世風呂前編卷之上 /404

参考文献 /415

后 记 /417



第一部分 中世文学

中世文学概观

1192年，源赖朝在镰仓开设幕府，成为征夷大将军；1603年，德川家康统一日本，在江户开设幕府，这之间大约400年的日本处于“中世”时期。用历史上的时代来说，包括镰仓、南北朝、室町、安土、桃山时代。那是一个贵族权力衰退，武士进入社会的一切领域、掌控权力的时代。

镰仓时代的文学作品中，具有代表性的是《军记物语》，对日汉混合文体加以锤炼，栩栩如生地表现出了多样的人物形象。《平家物语》里面，一边结合平曲等讲述之物的音乐性，一边适应战斗场面、人情微处、恋爱表里等多样内容，或更似汉文，或更像日文，文体也被加以区分使用。而且，在带有一个特征性侧面的随笔文学中，不但佛教里的无常观被置于根底，各种各样现实的事件、人性论、处事论等也包含在内，用与之相符的文体进行描画。

另外，记述佛教之言、出家人故事的文章，强烈地表现出因果报应等佛教思想。它与作品中较多地引入含佛教用语等的汉语有关系。

室町时代是文化史上的一个转换时期，在语言表现的演变历史上也是一个划时代的时期。在当时用口语演绎的狂言和由传教士们记录的天主教文学等作品中，向近代口语发展的萌芽已清晰可见。

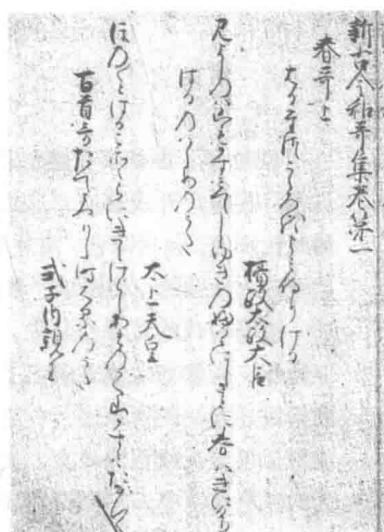


新古今和歌集



作品解説

《新古今和歌集》是八大集中第八部敕撰和歌集，书成于镰仓时代初期的元久二年（1205年）。受后鸟羽上皇之命，源通具、藤原有家、定家、家隆、雅经等人撰呈本集，又因上皇亲自进行所谓的“切缝”（修订），他被认为是实质上的最终编撰者。主要的和歌诗人，除了撰者以外，还有西行法师、藤原俊成、藤原良经、式子内亲王、俊成女等人。歌风倾向于显著而华丽。被称为“新古今调歌风”特征的是由起始句、第三句断开，及体言结束有很多歌。歌集因常用本歌引入和典故引用等表现手法，也有着古典性的一面，故难解之处很多。



▲『新古今和歌集』（為相本）



〔一〕仮名序

本文

やまと歌は^①、昔、天地開けはじめて、人のしわざ未だ定まらざりし時^②、葦原中国^③の言の葉^④として、稲田^⑤、素鷲^⑥の里よりぞ伝はれりける^⑦。しかありしよりこのかた^⑧、その道盛りに興り、その流れ^⑨今に絶ゆることなくして^⑩、色にふけり、心を述ぶるなかだちとし^⑪、世を治め、民をやはらぐる道とせり^⑫。

かかりければ^⑬、代々の帝もこれを捨てたまはず、撰びおかれたる集ども^⑭、家々^⑮のもてあそびものとして^⑯、言の葉の花^⑰、残れる木のもともかた^⑱、思ひの露もれたる草隠れもあるべからず^⑲。しかはあれども^⑳、伊勢の海きよき渚の玉は、拾ふとも尽くこと



なく^{いずみ そま みやぎ ひ}、和泉の柚しげき宮木は、曳くとも絶ゆべからず^{もの}。物みなかくのごとし。歌の道
またおなじかるべし^{うた みち}。

これによりて、右衛門督源^{う えもんのかみみなとの あさん みちとも}、朝臣通具、大蔵卿藤原朝臣有家、左近中^{おおくらきょうふじわらのあさん ありいえ さ こんのちゅうじょうふじわらの}将藤原
朝臣定家、前上総^{あそん さいだいえ さきのかすさのすけふじわらのあそん いえたか}藤原朝臣家隆、左近少^{さ こんのしょうじょうふじわらのあそん まさつね}将藤原朝臣雅経らにおほせて^さ、しいま
時をわかつたず^{とき}、たかきいやしき 人をきはらず^{ひと わ}、目に見えぬ神仏の言の葉^{め み かみほとけ こと は}も、うばた
まの^{ゆめ}夢につたへたること^えまで、ひろくもとめ、あまねく集めしむ^{あつ}。

各々撰^{おのおのえら たてまつ}べれるところ、夏引の糸の一筋ならず^{なつひき いと ひとすじ}、夕べの雲の思ひ定めがたきゆゑに^{ゆう くも おも い さいだ}、
緑の洞^{みどり ほら}、花かうばしきあした、玉の砌^{たま みぎり}、風すゞしき夕べ、難波津の流れをくみて^{ふう なにわづ なが}、清
み濁れるを定め^{にご さいだ}、浅香山の跡を尋ねて^{あさか やま あと たず}、深き浅きを分かつて^{ふか あさ わ}。

万葉集^{まんようしゅう}にのける歌は、これをのぞかず^{うた}、古今よりこのかた七代の集^{こきん}にいれる歌をば、
これを載する事なし^{の こと}。ただし、詞の苑にあそび^{ことば その}、筆の海を汲みても^{ふで うみ}、空飛ぶ鳥の網を
漏れ^{も みず}、水に住む魚の釣^{す うお つり}の^のが^のは、昔もなきにあらざれば^{むかし}、今もまた知らざると
ころなり。すべて集めたる歌二千ち、二十巻、なづけて新古今和歌集と言ふ。



注

- ① やまと歌…和歌。与汉诗的“唐歌”相对而言。紧接这个之后的一节，可能是呼应《古今集》[假名序]的“和歌，以人之心为材、具有万千之言”这一开头。
- ② 天地開けはじめて、人のしわざ未だ定まらざりし時…天地初开，尚未确定人类之营生的时候。
- ③ 葦原中国…芦苇丛生的荒原中的国家。古代的日本，因海边多生茂盛的芦苇而得此名。此称呼亦见于《古事记》及《日本书纪》。
- ④ 言の葉…这里指和歌。
- ⑤ 稻田姬…在出云神话中，成为了“素戔嗚尊”的皇后的女性。也称作“櫛名田比売”。
- ⑥ 素鷲の里よりぞ伝はれりける…从素鹫里传来的东西。“素鹫里”是出云国的地名。《古事记》里面记载，素戔嗚尊在这里建造宫殿与稻田姬成婚，并咏唱了“八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を（秀美之云，盛出立起。云作重垣，出云八重。为让围妻，云作八重。如此漂亮，八重之垣。）”这首歌。《古今集》[假名序]里面，将素戔嗚尊所咏唱的这首歌作为和歌的开头。
- ⑦ しかありしよりこのかた…如此那般，从产生之时以来。“しか”与“さ”都是指示副词，表示“像那样”。“このかた”是以来、从那以来之意，指自和歌产生后。
- ⑧ その流れ…和歌的传统。
- ⑨ 絶ゆることなくして…没有断绝的事情。“して”是接在形容词、形容动词后的接续助词，表示其状态的推移。
- ⑩ 色にふけり、心を述ぶるなかだちとし…或耽于恋爱，或作为讲述自己心思的手段。“色”是指恋爱。
- ⑪ 世を治め、民をやはらぐる道とせり…作为治理社会、缓和民心的方法。这是与《新古



今和歌集》[真名序]的“理世撫民（治世抚慈臣民）”相对应的说法。

⑫ かかりければ…因为是这样的。“かかり”是“かく+あり”压缩后的复合ラ变动词。

⑬ 撰びおかれたる集ども…撰置的敕撰和歌集的种种。所谓“敕撰和歌集”，是指根据历代天皇、上皇等的敕命或据院厅的公文书而编纂的和歌集。

⑭ 家々のもてあそびものとして…成为各人在家中的赏玩之物。

⑮ 言の葉の花…和歌之花。将和歌比喻成美丽的鲜花。

⑯ 残れる木のもともかたく…残留的树下也很少有。

⑰ 思ひの露もれたる草隠れもあるべからず…述说心思的和歌犹如露水遍布草荫，没有疏漏的可能。这是比喻撰集不可能漏掉优秀的名歌及吐露心情的秀歌，即为历代敕撰集尽收优秀和歌之事。

⑱ しかはあれども…虽然如此。

⑲ 伊勢の海きよき渚の玉は、拾ふとも尽くることなく…伊势海纯洁的岸边那美丽的石子儿，怎么也拾不尽。这是基于平安初期成立的歌谣之一“催馬楽（さいばら）”中的“伊势海清清，河湾潮已落。海藻贝玉类，摘拾无尽头”。

⑳ 和泉の杣しげき宮木は、曳くとも絶ゆべからず…和泉杣山上茂盛的宫殿使用的木材怎么伐也不可能伐完。可能是将《万叶集》[卷一一・二六四五]的“宮材引く泉の杣に立つ民の休む時なく恋ひわたるかも（和泉杣山上，造宫殿之材。木如劳动人，无休续恋情）”置于心头了吧。

㉑ 物みなかくのごとし。歌の道またおなじかるべし…万事万物，尽皆如此。和歌之道，也亦同此吧。说明名歌、秀歌选撰不尽。对应[真名序]中的“物既如此、歌亦宜然”而言的。

㉒ おほせて…下命令。“おほす”是对下命令的上级自然地产生敬意，为敬语的表现形式，译为“お命じになる”、“お言いつけになる”。

㉓ むかしいま時をわかつたず…对古今时代不做区别。

㉔ たかきいやしき人をきはらず…对身份高者与低者不做喜好分拣（选择作品）。

㉕ 目に見えぬ神仏の言の葉…肉眼看不见的神佛（所作）之歌。把《古今和歌集》中[假名序]的“肉眼看不见的鬼神也感到可怜”置于心头。

㉖ うばたまの…接于“夢”的枕词。

㉗ 夢につたへたること…在梦中传承的歌。梦中之人咏的歌。

㉘ ひろくもとめ、あまねく集めしむ…广泛地探求，通过一切途径收集。“しむ”是使役助动词，理解为并列地接续于“もとめ”、“集め”两方。

㉙ 各々撰び奉れるところ…（五位撰者）各自选撰上奏的歌。

㉚ 夏引の糸の一筋ならず…不似夏天从蚕茧上抽取的丝一般。

㉛ タベの雲の思ひ定めがたきゆゑに…如傍晚的云处所不定、散乱而动那样，（取舍选择的）决定很是困难。

㉜ 緑の洞…（后鸟羽上皇的）仙洞皇官。以仙人所住的洞穴比喻上皇的皇官。



- ③③ 玉の砌…铺满玉石般美丽的檐下铺路石。“砌”是指檐下接雨滴的铺路石。
- ③④ 難波津の流れをくみて…吸取（被视为和歌模範的）难波津之歌的传统，基于《古今和歌集》[假名序]的“難波津に咲くや木の花冬ごもり今は春べと咲くや木の花（难波津处，梅花正开。今置春日，开放之梅）”。同一书中将这个称为“歌之父”。“冬ごもり”是“春”的枕词。
- ③⑤ 清み濁れるを定め…决定歌的好坏。“清み”、“濁れる”是“流れ”的缘语。
- ③⑥ 浅香山の跡を尋ねて…参照浅香山的古歌。基于《万叶集》[卷一六·三八〇七]的“安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに（安积山上，山影映井。浅浅之心，却未拥有）”。《古今和歌集》[假名序]中将这称为“歌之母”。
- ③⑦ 深き浅きを分かつてり…对歌境及联想的深浅进行了区别。“深き”、“浅き”是“山”的缘语。
- ③⑧ 万葉集にいろ歌は、これをのぞかず…编入万叶集里的歌，对此不加以排除地载入。
- ③⑨ 古今よりこのかた七代の集にいろ歌をば、これを載する事なし…古今集以后的七代敕撰集里编入的歌，不予载入。
- ④⑩ 詞の苑にあそび…徘徊于和歌之苑。“詞の苑”比喻和歌之多。
- ④⑪ 筆の海を汲みても…就算从文笔之海中抄写再多歌。“筆の海”比喻抄写的和歌数量之多。
- ④⑫ 空飛ぶ鳥の網を漏れ、水に住む魚の釣を逃れたるたぐひ…就像翱翔高空的飞鸟逃出丝网、栖息水中的鱼儿逃离钓钩一般。这指撰集中遗漏之事。



現代語訳

和歌は、昔、天地が開け始めたばかりで、人間の営みがまだ決まらなかった時に、葦の生えている原の中央の国（日本）の歌として、（素戔鳴尊の妻である）稻田姫と（その夫の）素戔鳴尊がお住みになった（出雲の）素戔の里から伝わったものであるよ。そのようにして起こった時以来、和歌の道は盛んに興隆し、その伝統は今まで絶えることがなくて、（個人的には）恋愛に没頭したり、自分の思いを述べる手段としたり、（社会的には）世の中を治めたり、人民の心を和ませる方法としたのである。

このような風であったので、代々の天皇もこの和歌の道をお捨てにならず、撰んでお置きになった勅撰和歌集の数々は、各人の家々で賞翫するものとなって、美しい花が残っている木の下もめったになく、思いを述べた和歌という露が漏れている草陰があるはずがない。そうではある



译文

和歌，是指往昔天地始开不久、人类生存尚未确定之时，作为遍生芦苇的荒原中央之国（日本）的歌儿，从（素戔鸣尊之妻）稻田姬与（其夫）素戔鸣尊居住的（出云国）素戔里传来。自产生以来，和歌之道就兴隆起来，其传统至今不绝，（从个人角度来说）成为耽于恋爱、抒发自我感情的手段，（从社会角度来说）成为治世道和收民心的手段。

正因为如此，历代的天皇也不忍抛弃这种和歌之道，撰成数量众多的敕撰和歌集，成为各家玩赏之物，美丽的花朵尚存的树下也很少见，讲述感受的和歌如同露水遍布草荫，也更不会有漏掉的了。即便如此，伊势海纯洁的岸边那美丽的石子儿，拾也拾



が、伊勢の海の清らかな波打ち際の美しい石は、いくら拾っても尽きることはなく、（また）和泉の国の杣山に繁る宮殿用の木材はいくら伐り出してもなくなるはずはない。物事はすべてこのようなものである。和歌の道もまた同じで（撰び尽くせないもの）だろう。

こういうわけで、源通具、藤原有家、藤原定家、藤原家隆、藤原雅経らにお命じになって、昔と今の時代を区別せず、身分の高い者と低い者を選び好みすることなく（作品を撰び）、目に見えない神や仏の歌も、（さらには）夢の中で伝え受けた歌までも、広く探し求めさせ、すべてにわたって集めさせた。

（五人の撰者の）各々が撰んで奏上した歌は、夏にまゆから引いて取る糸のように一様でなく、夕方の雲が所定めずに乱れ動くように、（取捨選択の）判断が難しいので、（後鳥羽上皇の）仙洞御所で、花が芳しい朝や、玉を敷き詰めたように美しい軒下の敷石に、風が涼しく吹く夕暮れに、（和歌の模範とされる）難波津の歌の流れを汲み取って、歌の良し悪しを決め、浅香山の古歌に照らして、歌境や発想の深い浅いを区別した。

（すでに）万葉集に入っている歌は、これを除かず（に載せ）、古今集以後の七代の勅撰集に入った歌は、これを載せることはしない。ただし、いくら和歌の苑を歩き回り、文筆の海の中から多くの歌を書き写しても、空を飛ぶ鳥が網から逃れ、水に住む魚が釣り針から逃れるように、撰集からもれることは昔からないわけではなかったので、今回もまたわからないところである。（なお）全体で集めた歌は二千首、二十巻で、名づけて新古今和歌集という。

解 説

《新古今和歌集》里面，有以汉文记录的〔真名序〕和〔假名序〕，前者由藤原亲经执笔，后者由藤原良经执笔。两者都是从下令撰集的后鸟羽上皇的立场进行记录，并密切地对应着。本书因为页数关系，所以决定对〔真名序〕忍痛割爱，只选列〔假

不尽，（而且）和泉国的杣山上建宫殿用的茂盛木材，伐也伐不完。万物尽皆如此。和歌之道也与此相同（撰也撰不尽）。

基于此因，上皇才命令源通具、藤原有家、藤原定家、藤原家隆、藤原雅经等人，不以古今分时代，不以爱好别身份（编撰作品），对于肉眼看不到的神佛之歌，（甚至）连在梦中继承的歌都广为探求，尽一切手段进行了收集。

（五名编撰者）各自编奏的歌，不似夏天从蚕茧上抽取的蚕丝，而像傍晚彩云处所不定、散乱而动那样，（取舍选择的）决定很是困难，于是就在（后鸟羽上皇的）仙洞皇宫里，鲜花芳香之晨，铺满玉石般美丽的檐下铺路石上，在凉风吹拂的傍晚，取（被视为和歌模範的）难波津之传统，以决定歌的好坏，借浅香山之古歌区别歌境及联想的深浅。

（已经）编入《万叶集》的歌，对此不加以排除（地载入），古今集以后七代敕撰集里编入的歌，不予以载入。只是，无论怎么徘徊于和歌之苑，无论从文笔之海中抄写再多的歌，也如同翱翔高空的飞鸟逃出丝网、栖息水中的鱼儿逃离钓钩一般，撰集中存在遗漏一事，古来有之，因此本次也尚有不明之处。（另外）整体上所收集的歌有两千首，二十卷，命名为《新古今和歌集》。



名序」。

该「假名序」的笔者记为后鸟羽上皇，动作的主体（主语）也都是上皇，但实际上的笔者则如上述所言是藤原良经。良经对待上皇及编撰者们编撰的歌不是原样采用，而是始终将它们作为一个资料。即使是《古今和歌集》「假名序」里面作为“歌之父母”被选列的“难波津之歌”及“安积山（浅香山）之辞”（【注】③④⑤）等，也被良经作为自己的基准，并对歌的好坏、和歌的意境以及联想的深浅加以区别编撰而成的。

另外，虽然没有从《古今和歌集》以后的七代敕撰集中拣取歌，但对于《万叶集》中的歌，未避开选录。尽管存在些许改变，但就连持统天皇的“春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天香具山（春去夏似来，仙境香具山。凉着纯白衣，见衣思仙山）”、山部赤人的“田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ（田子海湾出，雪白富士山。因雪成洁白，高峰雪不停）”、大伴家持的“かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞふけにける（宫中御阶上，落着雪白霜。见霜便已知，今已是夜深）”等百人一首中所载的歌也被选录。那也许是遵从了藤原定家在《近代秀歌》中所述的“词欲从古、心欲求新”的思想，也或许是根据了顺德天皇的《八云御抄》中“大凡欲深知歌之详情无过于《万叶集》。广泛了解歌之情况为古今之第一。对词而言解惑之法无过于《源氏物语》”的看法。

問題

- （一）请阐述和歌所具有的历史性意义。（到第三行）
- （二）请找出两个成对偶句的地方。（到第七行）
- （三）请阐述五位编撰者撰歌的基准。（到第十一行）
- （四）请阐述后鸟羽上皇针对编撰者们的撰歌做了何种应付。（到第十四行）

（五）请推测命令编撰上呈的后鸟羽上皇和编撰代表藤原定家决定“《万叶集》中收编的歌、对此不作排除”的根据。



【二】春の歌

本文

をのこども^①、詩を作りて歌に合はせ^②
 はべりしに、水郷春望といふことを
 見渡せば 山もとかすむ 水無瀬川^③
 タベは秋と^④ なに思ひけむ^⑤
 （後鳥羽上皇^⑥）（春・三六）



後鳥羽上皇

新古今和歌集



注

- ① をのこども…殿上人等。廷臣们。
- ② 詩を作りて歌に合はせ…作汉诗以对和歌。诗歌的对歌。像对歌那样以同样的题目，一方作汉诗，另一方咏和歌，竞其优劣。
- ③ 水無瀬川…摄津国(大阪府)三岛郡的河，河南有水无瀬之乡，乡里有后鸟羽上皇的离宫。
- ④ タベは秋と…傍晚的风景是秋天的好。
- ⑤ なに思ひけむ…为什么会那样想呢。“なに”是为何、为什么之意。“けむ”是过去推量的助动词，译作“た”、“だろう”。
- ⑥ 後鳥羽上皇…高仓天皇的第四皇子、第八十二代天皇。在位期间为治承四年(1183年)至延应元年(1198年)，但是让位后，土御门、顺德、仲恭天皇三帝实行了院政。他对和歌有很高的热情，再兴和歌之所，命令藤原定家等人选撰呈送《新古今和歌集》，同时也亲自核对撰集。家集有《后鸟羽院御集》，歌论书有《后鸟羽院御口传》。他策划打倒镰仓幕府引发承久之乱，失败之后被流放到隐岐并殁于此。在《新古今和歌集》中采用“太上天皇”这个称呼，那是对天皇退位之后的尊称，同“院”、“上皇”。



現代語訳

廷臣たちが漢詩を作って和歌に合わせましたとき、「水郷春望」という題で詠んだ歌

あたりをずっと見渡すと、遠くの山の辺りはかすみ、近くを水無瀬川が流れている。(この美しい春の夕景色を見ていると)「夕暮れの景色は秋に限る」などと(今まで)どうして思っていたのであろう。



译文

与朝廷的大臣们作汉诗对和歌时，吟了以“水乡春望”为题的歌：

眼望远山雾朦胧，
近有水无瀬河流。
因为何故见美景，
至今尤思晚景秋。



解説

通过眺望“山麓朦胧水无瀬河”的美丽景色，笔者渐渐感到了春日黄昏的景色也实属精彩，所谓“晚景是秋日”之见，是平安朝以来的审美意识。正如清少纳言的《枕草子》中「春是黎明」一段也有着“秋是黄昏”那样，这属于传统性的固定观念。以后鸟羽上皇为首的朝臣们也应该持有那种观念，所以因那样眺望水无瀬河的春日黄昏而发现了新美的惊喜之情包含其中。整体上可以说是安静、多彩、富含余韵。



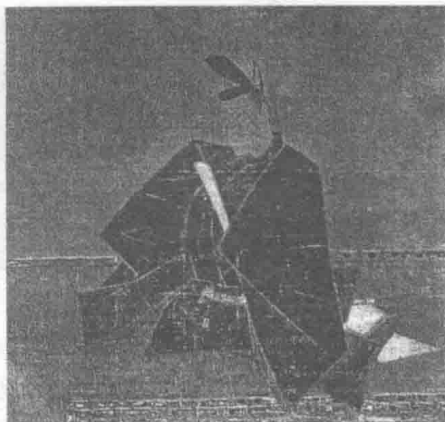
問題

- (一) 关于春秋之美，到目前为止的传统性审美意识是什么样的。
- (二) 请说明其审美意识通过什么发生了什么变化。



本文

ひやくしゅう たてまつ とし
百首歌^① 奉りし時
うめ はな おい そで うえ
梅の花 にほひをうつす^② 袖の上に
のき つき う
軒もる月の かげぞあらそふ^③
ふじわらのてい か
(藤原定家^④) (春・四四)



▲藤原定家(冷泉家時雨亭文庫)

注

- ① 百首歌…确定一定的题目、为歌道的修行聚集百首而咏唱的歌。这是后鸟羽上皇召集的首批百首歌。
- ② にほひをうつす…传播着梅花的清香。将花香漂移说成是梅花“移す”，是对梅花拟人化的表现。“うつす”，代表花香“移す”之意，与月光“映す”之意相呼应。
- ③ 軒もる月のかげぞあらそふ…从屋檐缝隙中透来的月光似与梅香竞相争般地映照。着。“月のかげ”是指月光，“月”也被拟人化了。月光映在衣袖上，是以衣袖被泪水淋湿为前提的。这是以《古今和歌集》[恋・五・七四七]中在原业平的歌“月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして（月何非昔月，春何非昔春。不得已已是万事变，唯有命运一般同）”作为本歌，然而在那里直接表现着在原业平那充满悲哀的孤愁。
- ④ 藤原定家…藤原俊成的第二个儿子。他是《新古今和歌集》、《新敕撰集》的编撰者，继承其父的衣钵，确立了象征性的歌风，并为后鸟羽上皇所称赞，曾作为歌坛的指导者而活跃。所著家集有《拾遗愚草》，日记有《明月记》，歌论书有《近代秀歌》、《每月抄》等。《小仓百人一首》也被视为其作品。

現代語訳

百首の歌を（上皇に）詠進した時
梅の花が匂いを移している（懐旧の涙に濡れている）私の袖の上に、軒の隙間から漏れてくる月の光が梅の香りと競い合うように映っていることだ。

译文

（向上皇）咏进百首歌之时
梅花香散（怀旧之泪淋湿）我衣袖，
映照檐隙与月争。

解説

定家の这首歌，作为在原业平之歌的本歌引入而得到共识。原本所谓本歌引入，